TOKYO2020 オリンピック・パラリンピック選手村チーフデンティストを経験して

What I Learned Through Experience as a Dental Volunteer Staff at TOKYO2020 Olympic and Paralympic.

本間輝章
Teruaki HONMA

（ほんま・てるあき）
ICDフェロー
新松戸総合歯科診療所

歯科医師になり、米国に留学をさせていただく機会を得て人種のるつぼであるニューヨークで３年半の生活を送った。米国ニューヨーク大学在籍中に、ドミニカ共和国への歯科ボランティア団への参加をさせてもらった。同大学学生と、私の様なポストグラデュエート、ファカルティ合わせて15名で、同国を訪問。１週間ぶっ通しで朝８時から17時ごろまで、冷房も壁もない廃校の様な場所（実際は運営している学校）で椅子と机で診療をした。１年以内に歯髄炎を起こす可能性のある歯は全て抜歯となる。なぜならば今後１年間また同大学がボランティアで来るまでは歯科診療を受けることができない人たちだからである。子供でも10本近く一気に抜歯になる子もいて、カルチャーショックを通り越して、医療とは何か？ という疑問がぐるぐる回ったのを覚えている。

また私が留学していたニューヨークでも同じ様な経験があった。米国では通常すべての歯科診療が自由診療となっている。よって大学では初診の際にはまず金額を提示する。初診料や検査料、画像診断も含めての金額を提示して、払えるのであればやっと診察を受けることができる。

言い換えれば、この段階でお金がないので帰りますという患者がいるのである。

日本では保険診療で誰もが高度な歯科診療を受けることができる。保険診療で断られることがないのが当たり前となっているので、想像もしたことがなかったが、痛みに悶えている患者さんが薬だけでもくださいと言っていても、お金が払えないなら、さようならとクールに返してしまうのである。医療の原点とは何か？　と疑問に思いながらも、いつしか日々あふれる患者さんを診ることの忙しさでそんな事にも麻痺をして、自分でもまずは初診で見積もりをサクッと作って提示し、もし払えないなら「次の患者さんどうぞ」となっていたのである。

日本に帰国して毎日臨床をこなしているとオリンピック・パラリンピックの開催が東京で決まった。子供の頃には競技スキーをやっていて夢はオリンピックなどと言っていたが、都内のど真ん中の学校のスキー部に所属した私は、いざレースとなると雪国の選手に足元にも及ばない事実に夢打ち破られた。40代になり

図１　チーフデンティストとオリンピックモニュメント

図２　両手欠損のパラリンピック卓球選手と共に

クレー射撃を始めた。射撃の先生から選手人口が少ないのでオリンピックを目指せるよなんて言われ、調子に乗って練習したが、毎日臨床をしていて趣味程度でやっている僕には全然なのは言うまでもない。

ある日、インプラントの学会を通じて仲良くさせていただいていた、岩手医科大学教授の近藤尚知先生より思いもかけないお誘いをいただいた。TOKYO2020の選手村で歯科医院をやるので、英語ができて一般臨床もできる僕に手伝って欲しいという事だった。ついにオリンピック出場の夢が叶うとすぐに快諾させていただいた。コロナ禍で準備もギリギリまで難航したが、組織委員会の皆様の寝ずの努力の甲斐もあって、なんとか開村日にはある程度の診療所の形にできた。

選手たちが海外から続々と入村してくると、すぐに歯科のオンライン予約はいっぱいになっていった。チェアは５台、CT、スキャナー、CADCAM完備の最先端歯科診療所である。選手たちはスケーリングから、補綴処置まですべて無料で受けることができる。よって普段歯科診療を受けることができない忙しいアスリートが多く訪れるかと思いきやそうではなかった。

オリンピックの選手といえば、世界の花形スターである。みんな歯は綺麗で、当然最高の治療を受けていると思っていたが、先進国以外の国の選手たちは歯科診療をろくに受けることができていない。また受けたくても自身の国の歯科の医療レベルが低いといった現実があるのである。それゆえ、練習や準備に忙しいはずの選手達が患者として押し寄せ治療にあたった。

私が話せるのは日本語と英語、それ以外の言語は自動翻訳機（ポケトーク）を使って会話をした。明日試合というのに歯が割れてしまった、詰め物が取れた、前歯を折った等々様々な方が来院した。治療が無料であるという事、短時間でなるべくできることをやるというのは、先述のドミニカにいった時と同じである。

とにかく「目の前の患者さんの痛みや悩みを取り除く事に全力を尽くす」事が、医療の原点であると改めて実感をした。

パラリンピックの時期になると、多くの障害を持つ選手達が来院した。両腕がない人、知的障害や車椅子生活の人など、あれだけ多くの装具や車椅子を一気に見たのは生まれて初めてであった。両手がないのにどうやって歯を磨いているのか？ とある患者さんに聞くと、足の指で歯ブラシを持って磨くんだと教えてくれた。人間には全く不可能なことなどなく、あらゆる環境に対して努力をすれば可能にできてしまう動物なのだと学んだ。

また、歯科医師でパラリンピック選手の方が診療所の見学に来てくださった。彼女はいっぱい写真を撮りながら「見たことない機械ばかり！」と言い、熱心に色々な機材への質問をしてきた。日頃日本の診療所では当たり前である、光重合型のコンポジットレジンやオートミックスのセメントなどでさえ国によっては存在し得ないのである。

歯科医療レベルや歯科機材の普及などの差は国に

図３　歯科総合チーフ近藤尚知先生と共に

図４　選手がインスタグラムに投稿

よってのばらつきがとても大きく、もちろん統一していくことは難しいのかもしれない。しかしながら私は世界中で国際的な歯科医療、機器のレベルを上昇させて、世界中の歯に困った人を助ける力を強くしていく協力をしていきたい。

また障害のある人であっても、健常者と同じ歯科診療が受けることができるなど、患者さんにとって「分け隔てのない医療」が提供できるような取り組みを行うべきだと感じた。